



ノロウイルス胃腸炎

感染制御部 橋本 章司

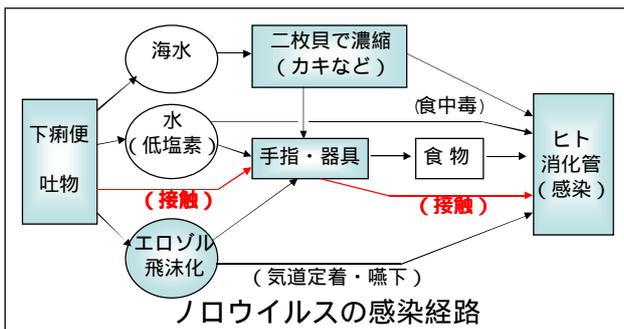
今回は介護施設での集団感染・死亡例の報道を始め、今注目されているノロウイルス胃腸炎のお話です。

ノロウイルスと胃腸炎の要点

(1)ノロウイルス：直径 38 ナノメートル(100 万分の 38mm)の小型球形ウイルスで、生きたヒトの細胞の中でのみ増殖し胃腸炎を起こします。1 本鎖(+)RNA ウィルスのため、HIV ウィルス同様に突然変異率が高く、多くの遺伝子型を示します。

(2)ノロウイルス胃腸炎：潜伏期間は 24~48 時間で、嘔気・嘔吐(小児で多い)、腹痛、下痢(大人で多い)、38 以下の発熱を示します。通常は 3 日以内に後遺症を残さず治癒しますが、高齢者や基礎疾患のある例では吐物による窒息、誤嚥性肺炎、脱水症などを併発して死亡する場合があります。感染後 1 週間は便中にウイルスが排出される(摂取後 15 時間後から始まり、25~72 時間後がピークで、最長 3 週間)ので、症状消失後も感染源になります。有効な抗ウイルス薬は無く、対症療法(輸液など)が中心となります。

(3)感染源：汚染下水の流れ込む海水中でノロウイルスは安定に存在し、一年中カキ、ハマグリなどの二枚貝の体内で濃縮されていますが、カキを生食する機会が多いため冬季に食中毒が多発します。感染力が非常に強く 10~100 個という非常に少量のウイルスでも感染が成立し、また環境中で安定なため、汚染食物だけでなく、わずかの汚染によるヒト(手指) ヒト、ヒト(手指) 器具 ヒト経路の接触感染も起こり、手洗いを主とする標準予防策の徹底が重要です。また加熱処理(85 ×1 分)で感染性を失うので、食物を十分に煮立てることが重要です。



(4)診断：便から排出されるウイルス粒子の電子顕微鏡観察に加えて、RT-PCR 法(ウイルス RNA から逆転写酵素で c-DNA を合成し、非変異部分の遺伝子の増幅反応を行い、ノロウイルスの同定とウイルス量を定量する)による保健所での迅速診断が可能になりました。診断例は 5 類感染症として小児科定点医療機関が報告します。

(5)頻度：米国では年間発生数 2300 万人、入院数 5 万人、死亡者が 300 人、また日本ではウイルス性食中毒の年間発生約 250 事件、患者約 8000 人のほとんどがノロウイルスによるものであり、この数年間横ばいです。集団感染例は病院と介護施設での発生が各 40%と多く(ホテル 8%、飲食店 6%、学校 4%)、汚染食物由来が 40%、汚染水由来が 3%、ヒト-ヒト感染が 12%(病院集団感染では 70~95%と圧倒的に多い)を占めます。また死亡例のほとんどが病院と介護施設での集団感染例です。

ノロウイルス胃腸炎の注意点

(1)「生食用」のカキでも安全ではない！

「生食用」は細菌量が基準値以下であることを示し、ウイルスなどは未検査です。ノロウイルスはプランクトンを摂取する際に生存中の貝の中で濃縮され、増殖はしないが安定に存在するため、汚染海域の二枚貝は全て中心部までの十分な過熱調理が必要です。

(2)無症状例や不顕性感染例に注意しよう！

無症状や軽い感冒症状や軟便のみの例も多く、通常患者同様に便からウイルスを排出するため、治癒後ウイルス排出遷延例と共に「自覚の欠如による感染拡大」危険群になります。全職員によるトイレ後と処置(や調理)前後の十分な手洗い、医療器具(や調理器具)使用後の十分な洗浄・消毒の徹底が重要です。

(3)先進国の娯楽施設でも油断は禁物！

塩素消毒が不十分(10mg/L 未満)な上水・井戸水やプールへの下水の混入、汚染水由来の調味料や氷を加えた食品、不顕性感染の調理人の料理などによる集団感染事例が米国を始め多数報告されており、注意が必要です

★院内で注意すべきこと

「標準予防策の徹底」これに尽きます。標準予防策とは、全ての患者の血液・体液・排泄物・損傷した皮膚などを感染の可能性がある対象として対応する疾患非特異的な対策です。ノロウイルスが検出されているとか、されていないとかに関わらず、排泄物に接触する可能性のあるケアを行なう場合は以下の対策を実施してください。

手指衛生

感染対策の基本となり、一番大きな役割を果たすのが手指衛生です。排泄物に接触する可能性のある処置やケアを行なった後は、手袋の着用の有無に関わらず必ず手指衛生を行いましょう。排泄物などの付着がある場合は石鹸と流水による手洗い、排泄物などの付着がない場合は速乾性の手指消毒剤による手洗いを徹底することで、医療従事者の手指を介した交差感染を防ぎ、また自分自身を感染の危険から守ることが出来ます。



防護用具の使用

オムツ交換など排泄物を扱う処置やケアを行なう場合は、手袋や使い捨てエプロンなどの防護用具を使用しましょう。使用した防護用具は環境を汚染させないように、感染性廃棄物として廃棄します。

「なんだか最近、病棟で下痢や発熱、嘔吐など胃腸炎の症状を呈する患者が多い!？」と思ったら、感染制御部へご連絡ください。

